

『週刊 東洋経済』に掲載！

立川相互病院医療チーム第1陣の報告会が、3月22日発売(3月26日号)の「週刊東洋経済」に『被災地・宮城にいち早く医療支援、立川相互病院が派遣チーム報告会』として紹介されています。本文では、『現在、全国にある全日本民医連加盟医療機関は坂総合病院に数百人も応援人員を派遣。被災地の医療支援に従事している』と民医連の支援活動を紹介しています。

下記のホームページでも紹介されていますのでご覧ください。



<http://www.toyokeizai.net/business/society/detail/AC/82baf6f18cc27f0938d8cae2ad97b438/>



現地レポート：松澤 広高歯科医師（健生会/相互歯科）

24日、技工士を連れて野蒜地区の他法人のケアハウスに。震災以来、入れ歯を洗えない入所者とディケアに来たまま、帰る家を失った利用者約80人のところに「入れ歯洗い隊」を組織して向かう予定の井上歯科医師（宮城/松島海岸診療所歯科）と手動加圧式噴霧器(写真左)。

都の被災者受入所（東京武道館）で医療相談を実施

昨日、3月23日、東京武道館に東京民医連の工藤貴美子理事が医療相談に参加してきました。

福島から8カ月の赤ちゃんを連れ、自家用車で避難してきたという夫婦に話を聞いた。「原発事故のあと、子どもの事を考えると怖くて現地にいらなくて避難してきた、避難所では赤ちゃんが泣いたりすると気を使う、でも両親ともいないので他に行くところがない、夫は食品の会社を自営していたが、仕事もできない状態になり（人がいなくなり、物流が途絶えた）できれば東京で住むところを探したい、都営住宅に申し込んだ、赤ちゃんのミルクやおむつは足りている」と。

避難所は大小ふたつの武道場を開放し、畳敷き 家族単位で段ボールの仕切りがあるだけ。歩く人から丸見えの状態 毛布や飲料水は自由に使える(?) 暖房は入っている。畳6枚から広くて8枚(家族の人数に応じて)程度。要介護者一人は家族と共に奥の一部屋を与えられていた。ソファをベッド代わりにして横になり、下肢の浮腫みがある状態。血圧やや高め 便秘2日目と「本当は自立している人しか避難所で受けないそうだが、仕方ないですね」と天沼医師(足立区医師会)。

この避難所は乳児(3カ月、8カ月、1歳児数人) 児童や高齢の方も多いが、外国人も受けている。必ずしも福島原発避難者だけでなく、陸前高田や小名浜の津波災害から何とかここまでたどり着いた方々も多い。中沢医師が都の職員に「PTSD 防止のためにせめて同じ市町村で避難者をグループ分けし、お互いのコミュニケーションがとれる区割りにして、名前や住居がお互いに分かるように情報を提供するように」と提案したが、都職員の対応は名簿の把握はしているが個人情報保護法に抵触するから今のところは出来ない。

避難所の方々はこの先の生活、仕事、学校の事など不安でいっぱいにもかかわらず、東京都は“自立した方が対象”として聞き取り等を行っていない。小中学生や若者へのフォローも不十分であり、ボランティア等の受け入れを断ったりしている。情報の迅速な共有が欠かせないと思う。